

〈創作〉

重源上人と徳地人形浄瑠璃

Holy Priest Chogen and Tokuji Puppet Play with Jyoruri Music

片山 剛¹

要旨

山口市徳地（旧山口県佐波郡徳地町）には重源上人に関する遺跡や伝承が数多く残っている。それらは、平家による焼き討ちに遭った東大寺再建のため、重源が徳地の材木の調達に行き、同地にさまざまな足跡を残したことによる。一方、徳地には素朴な人形浄瑠璃が民俗芸能として残っている。筆者は、重源に取材した浄瑠璃創作を打診され、現地に赴いて重源の足跡を追いつつ浄瑠璃作品を書くことにした。本稿はその創作経緯と作品を掲載するものである。なお、最後に拙作「おくり提灯」を付載しておく。

キーワード：重源上人，徳地人形浄瑠璃，創作浄瑠璃

Holy Priest Chogen, Tokuji Puppet Play with Jyoruri Music,
Creative Jyoruri

1 徳地人形浄瑠璃について

徳地は、平成の大合併で2005年10月1日に山口市に編入されるまでは山口県佐波郡徳地町であった。町域は290km²もあり、その8割が森林だという。いきおい、林業が盛んで、ほかに農業や肉用牛の飼養、徳地和紙の生産などの産業がある。そして南に隣接する防府市とのつながりを持ちつつ、徳地ならではの文化をはぐくんできた。そのひとつの例が徳地人形浄瑠璃である。

「山口県の文化財」¹⁾の「文化財要録・徳地人形浄瑠璃」によると、徳地人形浄瑠璃の起こりは次のようなことである。明治35年(1902)頃に大阪の文楽座に出ていた野澤吉甫師²⁾らが浄瑠璃を伝授したことによって人気が高まり、やがて安田政一氏という人物が九州まで行って博多人形を作らせ、それをういた人形が製作され、竹串を用いた串人形として井上菊蔵氏、石井国弘氏らに伝わった。

ただ、第二次世界大戦後には、娯楽も多様化し、後継者も次第に不足するようになって、消滅の危機に瀕したようである。しかし、伝統の灯を消すまいという志ある人たちによって徳地人形浄瑠璃保存会が結成され、1965年に徳地町無形文化財、1976年に山口県無形民俗文化財に指定されている。そして、1973年頃から徳地山村開発センター

で食堂を営みつつ徳地人形浄瑠璃に心血を注いでいた池田八重子氏(1922~2014。先述の石井国弘氏の娘)が、次世代育成のために子どもたちの指導をおこなうようになった。学校が終わると同センターのロビーなどで懸命に指導し、子どもたちは「池田のおばちゃん」「池田先生」と慕いつつその熱心な稽古にくらいついていた。そして、子どもだからと言って手を抜かなかったという厳しい稽古のあとは、経営していた食堂でチャーハンやアイスをふるまうこともあったそうである³⁾。

その池田氏の没後は、弟子に当たる世代の人によって保存会が継続しているが、現代における伝統文化の宿命というべきか、ご多分に漏れず後継者不足に悩んでいるのが現状である。なお、池田氏の夫君(「池田のおじちゃん」と呼ばれていた)も舞台の修理や上演会場までの移動を担当する裏方として活躍されたそうである。

徳地人形浄瑠璃の舞台は幅約1.5メートルという小ぶりなものである。舞台上手あるいは中央に陣取った語りと三味線による義太夫節に合わせて舞台の下から操る。ひとりで何体もの人形を遣うため、動きのない人形を固定した状態でそのときの話者である人形を動かすのである。人形は素朴なもので、それを遣うのは一見簡単そうに見えるが、実際はかなりの熟練が必要である。

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教育学部 教育学科

受理日：2023年9月1日



徳地人形（絵本太功記）

上演演目としては、以前は『傾城阿波の鳴門』がレパートリーに含まれていたが、今ではほぼ『寿式三番叟（二人三番叟）』と『絵本太功記』に「尼崎」に限られている。

ところが、2022年秋に、徳地人形浄瑠璃保存会の三戸昌子氏が『傾城阿波の鳴門』を独自に振り付けて上演された⁴⁾。

当日鑑賞された方の感想によると、場内から感動のあまりすすり泣きさえ聞こえるほどであった。この演目が復活したのは嬉しい限りで、池田氏の衣鉢を継いで徳地人形浄瑠璃に並々ならぬ情熱を注がれる三戸氏の意欲が強く感じ取れる催しであった。



傾城阿波の鳴門（2022.9.23）

2 重源上人の伝承と徳地人形浄瑠璃

徳地には東大寺大勧進職を務めた俊乗房重源（1121～1206）にまつわる史跡や伝承が残されている。それは、平重衡ら平氏軍の南都焼き討ちの結

果焼亡した東大寺再建のための材木を、重源がほかならぬ徳地に求めたことによる。東大寺金堂（大仏殿）の梁、南大門の柱、南大門の金剛力士像（阿像、吽像）に使われた木材は年輪年代測定法によって徳地産のものと考えられるという⁵⁾。

『吾妻鏡』⁶⁾に

同（文治一筆者注）二年丙午四月十日始入周防國

とあり、

『東大寺造営供養記』⁷⁾も

文治二年春被寄周防國四月十日大勧進以下十餘人并宋人陳和卿番匠物部為里櫻嶋國宗等始入周防杣

と記すように、重源は文治二年（1186）の初夏に宋の陳和卿らとともに周防入りした⁸⁾。『東大寺造営供養記』によれば、そのときの周防の人々は、源平合戦の余波で

拂地損亡故、夫者賣妻、々賣子、或逃亡、或死亡、不知数者也

と、ひどく窮乏していた。同書にはさらに、重源が周防の岸辺に着いた時、飢えた人が雲霞のごとく集まっており、重源は船に備えていた米を施したとも記されている。そして重源は人心を掴み、その後の資材調達に地元民の多くの協力を得ることになったというのである。

こういう経緯があるため、重源の慈悲心につつまれる伝承が徳地にも多く伝わっている⁹⁾。たとえば、臼谷（うすだに）地域で、子どもたちが栗の実を採るのに難渋しているのを重源が見たことがあった。そこで「栗を採ってくれる若い人たちはいないのか」と尋ねると「若者は東大寺の材木のために山に行ってしまった」と言われた。重源は申し訳なく思い、しばらく念仏を唱え、翌年からこの地に生える栗の木は低木になったという（子どもたちに栗をもらった重源がそのお礼に低木にした、という異伝もある）。また、御馬（ごもう）地域の人が材木の運搬を手伝った謝礼として、重源がこの地域に雑草が生えないように祈ったという話もある。

重源は材木の伐採や運搬にも多くの工夫をしたとされ、また、杣人らの保養やけがの療養のために石風呂を各地に作ったと言われる。石風呂というのは、石室の中で柴木などを燃やして周囲の石を熱し、その中に入って蒸気浴、熱気浴をするものである。今も岸見の石風呂（国指定重要有形民俗文化財）を初め各所に残されているが、すべて

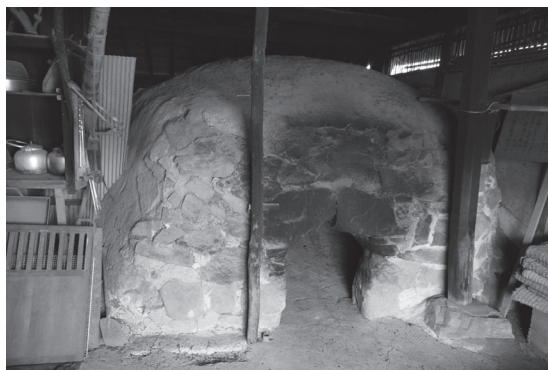


徳地の重源上人像
(Covid-19流行時でマスクをしている)

が重源の時代に作られたものではない。そもそも石風呂は薬師信仰や大師信仰との関わりもあり、重源の創意になるものではない¹⁰⁾。石風呂の形式は、石を積み上げた形（岸見など多数）や横穴式（野谷など）のものなどがある。



岸見の石風呂の外観



岸見の石風呂の内部

重源は杉で伐採した材木で筏を組み、それを佐波川¹¹⁾に流して運搬したが、浅瀬の部分では筏が流れず、川を堰き止めたうえで水路を作って水深を確保した¹²⁾。これを関水と言って、現在史跡として残されているのは山口市徳地船路のもの（国指定史跡）である。

この関水を少し上流に行くと僧取岩、僧取淵という巨岩とエメラルド色の淵がある。重源の弟子の蓮花（華）坊が筏で川を下っているときに誤っ



史跡佐波川関水付近

て岩に当たり、この淵に投げ出されて命を失ったと伝わる¹³⁾場所である。ここでは今も旱魃のときに蓮花坊の像とされる木像を用いて雨乞い行事が行われる¹⁴⁾。



僧取淵



僧取岩

重源にまつわる伝承はまだまだあるが、ここでは以下に記す創作浄瑠璃に関わるところを中心に簡単に述べてきた。

徳地人形浄瑠璃保存会の三戸昌子氏は、当地の

人たちに愛され親しまれている重源の逸話を浄瑠璃にして徳地人形を用いて上演したいとお考えになり、筆者に依頼して下さった。地域の芸能と徳地の誇る重源¹⁵⁾を重ねる試みはきわめて興味深いもので、筆者も快諾して作品を作ることにしたのである。

そこで、まずは現地を訪れて重源ゆかりの地を探訪した。すなわち、僧取淵、僧取岩、船路の関水、岸見・二宮・野谷の石風呂（以上、山口市徳地）・阿弥陀寺の石風呂、周防国衙跡、防府天満宮、周防国分寺（以上、防府市）その他、そして徳地と防府をつなぐ佐波川などである。さらに徳地人形やその舞台を三戸氏の好意で実見することができた。人形の種類、スケール、動きの特質などを見なければ書けないからである。その際、筆者も人形を遣わせていただいたが、想像以上に難しかったことを付記しておく。

2 『重源上人徳地功』

以下、拙作『重源上人徳地功（ちょうげんしょうにんとくちのいさおし）』の概要と本文を記す。ルビには現代仮名遣いを用いる。話者については（重）＝重源、（蓮）＝蓮花坊、（ふ）＝おふみ、（ま）＝おまさ、（柚）＝柚人と表記する。

※登場人物

重源上人
おまさ（御馬の村娘）
母おふみ（おまさの母）
蓮花坊（重源上人の弟子）
柚人たち

※とき

文治五年八月二日およびその後日

※ところ

「御馬の里」の段
御馬のおふみの家
「道行筏飛沫」
佐波川の筏の上

「御馬（ごもう）の里」の段

（梗概）重源上人と弟子の蓮花坊は御馬の里のおふみ母子の家に寄宿している。娘のおまさは蓮花坊にひそかな思いを寄せている。蓮花坊もおまさを憎からず思うが、出家修行の身では恋愛は叶わ

ぬことと複雑な気持ちでいる。おふみは若い二人の気持ちがわかるだけに心を痛めている。仲秋八月二日、重源がけがをしたためおふみの家で休み、代わりに蓮花坊が材木を流す現場に出た。ところが筏が巨岩に当たって蓮華坊が淵に沈んだという知らせが届く。

（本文）

玉敷ける家も何せむ世の中にみにくきものはいくさにて、人の命も野に咲く花もあへなく散らす狼藉に泣くは名もなき百姓（ひやくせい）と知らぬ輩（やから）ぞ愚かなる。

平家の軍勢あられなく放つ火箭（かせん）の勢いに南都東大寺の大伽藍、わけても金堂大仏殿、中におはすは盧舎那仏（るしゃなぶつ）、施無畏与願（せむいよがん）の印（いん）さへも熱き炎に包まれて残（ざん）なき姿になりたまふ。

ここに俊乗坊重源上人。諸国行脚のそののちに御弟子蓮花坊もろともに周防徳地の山中に材を求めて入（い）りたまふ。

御宿りには御馬（ごもう）の里。畑仕事にはそぼそと暮らすおふみが埴生の宿。娘おまさは二八（にはち）のつぼみ。愛に愛持つ愛らしさ。

（ふ）「これ、おまさ。お上人様のお怪我はどのやうなお具合ぢやな」

（ま）「アイ、夕べの腫れもよう引いて、朝餉もしつかり済まされました」

（ふ）「それは何より。そなたもようご介抱しちよつちやつたな（しちよつちやつたな）」

（ま）「さいなあ、重源さんのお世話をすれば、蓮花坊（れんげぼ）さんのお側にもいられるだけにうれしうて」

（ふ）「これこれ、『重源さん』の『れんげぼさん』のと馴れ馴れしいにもほどがある」

（ま）「それでも、おつかさん。村の誰もがそう呼んでぢや」

と、いつに変わらぬたわいなき親子の語りひするところに、ゆるゆると歩み出でたる俊乗坊重源上人。あとに従ふ若僧は水もしたたる蓮花坊。

（ふ）「これはこれは、お上人様。もうお立ちあそばしても大事ござりませぬか」

（重）「いやなに、おふみ殿。石風呂の効能と娘御の介抱でかうして歩くに不自由はなくなりました。足には自信のあるものを、小石につまづき膝打つとは、六十も末とて面目ない。それでも今日は山に出ませう。もう気遣ひには及ばぬ」

と気丈に言へば、蓮花坊、押しとどめ、
 (蓮)「お上人様。今日の筏は私が指図いたしますゆゑ、存分の御休息こそ願はしう」
 (ふ)「それぞれ、このやうな優しいお言葉のあるからは、今日はお若い蓮花坊様にお任せあつてゆりとお休みくださりませ」
 (重)「なるほど、こねええやうに(こねええやうに)してもらうてから、幸せます。ははははは」
 (ふ)「あの、お上人様のおつしやること。ほほほほほ」
 と、老いは老い同士(どし)、若者はまた若者の気心に、
 (ま)「そんなら早速、蓮花坊(れんげぼ)さん。山行きのお支度、致しませう。さあさあ奥へ」
 と手を引いて、合はす目と目も恥ずかしや。
 おふみはどこやら悲しげな心を隠し、
 (ふ)「お上人様、この村は盆地なれば、夏は暑うて冬は冷えます。何かとおからだに障りはしませぬか」
 (重)「なに、盆地といへば京の都も南都大和も同じこと。ふるさとにあるのとちつとも変はりませぬ」
 (ふ)「これは途方もない。花の都とこの村では、とんとひとつにはなりません。へえじゃけど(へえじゃけど)、お上人様。徳地の木々を大仏様のお屋敷になさるのはけっこうなことなれど、私はどうにも合点の行かぬことがございます。源氏よ平氏よと弓矢、刀を振り回し何の実りがござりましょ。私はどのやうな戦(いくさ)も嫌いでございます。正しい戦、美しい戦などといふものがあらうはずもござりませぬ。哀しみを受けるのは戦に巻き込まれた名もない人々。作物を奪はれ、土地を荒らされ、ちいとなりとも逆らうたら、虫けらのやうに命まで取られます。また、戦は大切な建物も、絵も本も焼いてしまいます。そんなことして手に入れた栄耀栄華(えようえいが)など爪のさきほども誇れるものではない…と思ふのは、田舎暮らしの貧者のたはごとでござりませうか」
 (重)「おふみ殿。そもじの言葉に何ひとつ間違ひはござらぬ。殺生は戒めの第一。さりながら、人といふのは愚かなもので、刀を持てば斬らうとし、こぶしを握れば打ちたくもなる。中でも、権力といふ形のない威勢を手にする、途端に心に狂ひが湧き、無用の力を振り回します。自らの考へは何もかも正しきものと思ひ、もしまた誤りに気付いても詫びもせねば改めもせぬ。弱き者を救ふの

がまつりごとの大義なれど、それが分からぬ者が戦を起こすのではあるまいか。この周防の地とて平家の西海落ちのあおりを受け、夫は妻を売り、妻は子を売り、逃亡する者、命を失ふ者、数知れずと聞いてゐます。おごる平氏の久しからぬは理の当然」
 と、しみじみ語らふその中(うち)に支度ととのへ蓮花坊、おまさは少し襟元を引き直しつつ控へゐる。
 (蓮)「少々着替へに手間取りました。さらばこれより野谷(のたに)にて杣人と合流して筏に乗り、船路、八坂、堀、伊賀地(いかじ)、あとは流れも穏やかに港まで参ります。日が暮れにはきつと戻りませう」
 と、言葉きりと言ひ置けば、
 (重)「山間(やまあい)は難所も多い、留意いたせ」
 (ふ)「お気をつけて」
 (ま)「蓮花坊さん、きつとご無事で」
 と見送られ、髪はなけれど引かるる思ひ、あとに残して出でて行く。
 重源、何やら胸に湧く不吉の思ひもやもやと、
 (重)「おふみ殿。奥にて念仏いたしたし。そもじも同座されませぬかな」
 (ふ)「これはこれはありがたきこと。これおまさ、このところ雨が降らぬぢやによつて、朝のうちに花の水やり済ませちよきんさい(すませちよきんさい)。よけりやあ、あとからお念仏にもきんさいや」
 と、言はれておまさは庭に降り、柄杓(ひしゃく)手に取り水やりの花は野の草、秋の花。
 へおほかたの秋来るからに悲しきに、山下とよみ鳴く鹿を恋しがつたる秋萩や、今ごろ筏の上に立つ君しのお草、生ひ茂る。とくお帰りとさし招くすすきは揺るる恋心。苔の衣の移り香か、誰(た)が脱ぎかけし藤袴。ももくさ咲ける秋の野に蓮花(れんげ)は散りぬる寂しさよ。
 おまさは内に立ち戻り、そつと両手を重ねつつ、
 (ま)「蓮花坊さん。お前が出家の身の上でなければこのまま徳地の村に引きとどめてでも一緒に暮らし、畑仕事に精出してやらの二人も育てたい。そんな願ひが叶はぬならば、私も尼に身をやつし、阿弥陀様のお迎へ待つて、同じ蓮(はちす)の花の上。きつと往生いたしませう」
 と、誓ふ言葉もいじらしく、奥の仏間に入りけり。
 時はいつしか午の刻。念仏(ねぶつ)もやみて

秋風の吹くよりほかに音ぞなき。

しじま破りてばたばたと杣人どもが駆け来たり、戸を叩いて

(杣)「重源さん、お上人様。内にござるか。一大事にごぞいます」

と、金切り声に驚く重源、おふみ、おまさも立ち出でて、

(一同)「こは何ごと」

と問ふより早く、杣人息せき声張り上げ、

(杣)「くの字曲がりの大岩に、筏の先がどつかと当たり、蓮花坊(れんげぼ)さんが投げ出され、我らの救ひも間に合はず、たつたひとこと『我、落ちにき』とおつしやつて、悲しや、そのまま川の中」

(重)「して、蓮花坊の行方は」

(杣)「流れに乗つたら浅瀬に上ると思うたんぢやが、そのまま淵の奥底に」

沈む心の重源、おふみ。おまさはわなわな肩震はせ、わっとばかりに泣き出だす。

重源、心に阿弥陀を念じ、

(重)「この重源が不覚のけがのその折しも、かかる不運のあるものか。さりながら、あれほど力も技も人にすぐれし蓮花坊。思ひも寄らぬこの過ちは…。ムム、さうであつたか。『我、落ちにき』とは淵に落つるといふ意味ならず。「名にめでて折れるばかりぞ女郎花(おみなえし)我おちにきと人に語るな」といふ遍照僧正(へんじょうそうじょう)の歌を引き、出家僧侶の身でありながら、恋に落ちぬと憂ひの心。それで心が迷うたか」

と悔やみたまへば、おまさは動転。

(ま)「そんなら蓮花坊さんは私のせいで」

(重)「いや、おまさ。誰のせいでもありはせぬ。これも蓮花坊が前世の因縁。ゆめゆめ自らを責むるでないぞ」

(ま)「いえいえ、私の心の浅きゆゑ、つまらぬいたづら、恋の罫。かけたがあだとなりました。蓮花坊さん、三途の川のお供する」

と、ありあふ銕(はさみ)取り上げて咽喉(のんど)に当つるを払ひのけ、

(重)「やれ娘、血迷ふな。人身(じんしん)受け難(がた)く、盲亀(もうき)の浮木(ふぼく)より稀なること。その大切な命をむやみに絶たば親への不孝、重き罪。この世でひたすら善根積み、浄土に行かねば、そもじを待つ蓮花坊にも会へぬぞよ。かくなるうへはひたすらに念仏いたせ、これ、おまさ」

と、たしなめられても乾かぬ涙、あふれて身も浮くばかりなり。

母は涙を拭ひつつ、

(ふ)「お上人様のおつしやるとほり、蓮花坊様の菩提を弔うが第一。さ、来世で会ふのを楽しみに。南無阿弥陀仏。なむあみだ」

(ま)「あい、南無阿弥陀仏、なむあみ、だぶつ」

と、振り絞るかそけき声は幾千万里、冥途の彼方に届くべし。

若き命は惜しめども、とどまらなくに、秋霧の蓮華化生(れんげけしょう)の旅に立つ、その志は朽ちずして、南都大和は東(ひむがし)のその大寺(おおてら)の盧舎那仏(るしゃなぶつ)。御殿の梁(はり)となりにけり。

「道行筏飛沫(みちゆきいかだのしぶき)」

(梗概)蓮花坊の事故のあと、怪我の癒えた重源はふたたび川下りをする。蓮花坊が沈んだ淵に至ると心で成仏を願い、さらに川を下っていくのであった。

(本文)

憂きことを思ひ連ねて雁がねの渡るがごとくこの佐波川に、浮かぶる筏の二つ、三つ(みつ)、五つ(いつ)、六つ(むつ)並べ、ざんざんざぶり。上(あ)ぐるしぶきを身に受けて、誰(た)が名付けしや僧取淵(そうとりふち)、僧取岩(そうとりいわ)に着きにけり。

重源上人、心に念仏。

(重)「あはれ悲しや、我が愛弟子(まなでし)の行く末長き蓮花坊、若き命を藻屑と為す。あれほど巧みに棹さす者が、恋に心の乱れしか。この水底(みなそこ)に今もなお身を横たふるか、悲しや」と、惜しむ思ひを胸に秘め、

(重)「さあその岩に棹立てて、皆々ゆめゆめ油断すな」

と、声を力にざんざんざぶり。ざんざんざぶり。ざぶりざぶりと行き過ぎぬ。

世の中は何か常なる佐波川のやがて瀬となる難所にて、水堰き止めて片寄せに水路を据ゑてすすいすい、百十八處(ひやくじゅうはっしよ)の関水(せきみず)を流す巧みに杣人(そまびと)は、(杣)「重源さん、重源さん、お前の知恵は底知れず。我ら凡夫は及ばぬ」

と崇められても首振りたまひ、

(重)「心仏衆生(しんぶつしゅじょう)に差別は

無し。この世のすべては心より現るるぞ」
と筏上（ばつじょう）の教へにまたも血潮はたぎり、
力を込めて

（杣）「えいやっさ」

（杣）「えいやっさ」

（杣）「えいやっさ」

（杣）「えいやっさ」

えいや、えいやの掛け声に筏のしぶきも響き合ふ。

やがて流れは穏やかに二の宮さまを後にして、
（重）「ここは岸見（きしみ）か、あの石風呂の熱
を浴ぶれば心地よく、耆婆扁鵲（ぎばへんじやく）
の配剤よりも命を延ぶる薬ぞ」
と、見やる岸辺に村人の紙漉く技の天日（てんぴ）
干し。この紙漉きも茶畑も上人様の御（おん）教へ。
かたじけなやと手を合はせ、心を合はせ、

（杣）「えいやっさ」

（杣）「えいやっさ」

下り下りて川口に至れば波打つ大海原。あとは瀬
戸内、舟路に任せ、盧舎那仏（るしゃなほとけ）
の待ちたまふ大和を指して。

（付載）異聞おくり提灯

ここに採録するのは2022年9月22日に山口市の
洞春寺において徳地人形浄瑠璃『傾城阿波の鳴門』
の前座のような形で上演された筆者の作品である。

すでに発表した創作浄瑠璃『江戸情七不思議』¹⁶⁾
のうち、「おくり提灯」は筆者の短編浄瑠璃の処女
作にあたり、文字どおりの拙作だと自覚している。
事実、演奏された回数は七作の中でもっとも少な
いのである。そこでまったく内容の異なった「お
くり提灯」を作り、作曲、演奏をしてくださる歌
舞伎竹本三味線の野澤松也師にお送りした。それ
が前述の日に松也師によって初演されたのである。
そこで、その内容をここに掲載し、これをもって『江
戸情七不思議』は完成したことになる。なお、松
也師によれば2024年夏に『江戸情七不思議』全曲
演奏会を予定しているとのことである。

『江戸情七不思議』「異聞おくり提灯」

※登場人物

ひさ（八百屋の隠居）

通りがかりの老人

（実はひさの亡夫吉左衛門の霊）

吉之助（八百屋の当主。ひさの息子）

（あらすじ）

七夕の夜のできごと。

最愛の夫を亡くし、息子一家からは何となく距
離を感じている老齢の「おひさ」は孤独な日々
に耐えきれず大川に身を投げようかと思っていたが、
見知らぬ高齢の男に止められる。

おひさは、この男性の優しい物腰に夫の面影を
感じ、つい夫の思い出話をしてしまう。それを男
性は話を聴いてくれて、空に浮かぶ天の川と牽牛
織女、さらには天の川の中ほどにある二重星（ア
ルビレオ）の話をしてくれる。

男は姿を消すが、男の置いていった提灯がふわ
りと浮き上がって道を照らし、おひさがしばらく
歩くと灯りが消えてまた少し先に提灯の灯りがあ
らわれる。

自分の身を守るように動いてくれる提灯を見て
いるうちに、おひさは今の男性が夫の魂であると
確信する。この提灯の灯りは女性を送ってくれる
道しるべであり、夫の魂を極楽浄土に送る送り火
のようでもあった。

気が付くと自宅に戻っていたおひさは息子から
邪険な態度を取られ、ふと空を見上げると天の川
の中ほどに二重星が見えた。それは涙でにじんだ
せいだったのだろうか。

（本文）

恋や恋。恋といふ名の悦びとその悲しみは老い
らくの心にさへも美しく燃ゆる花火と胸焦がす。
六十（ろくじゅう）に二年（ふたとせ）足らぬ黒
髪も少し細れる丸髷の便（びん）なきことの重な
りてうつつの日々のうつくしき夢追ふこともなき
世なり。

目にはさやかに見えねども、秋風ぞ吹く大川の
岸辺にひとり佇む姫。誰（たれ）を恋ふらむ面影
に浮かぶる人は幻の雲の上より聞こゆるは夫を想
うて恋ふといふ楽（がく）の音色か、はかなしや。

滔々と流るる川に一步二歩。水の底にも浄土は
ありや。南無阿弥陀仏は心の内。三歩歩めば後ろ
より、

「その足待つた」

と言ふより早く手に手を取れば、我に返つて女は
目をあけ、身を震わせて立ちすくむ。

男は提灯さし下ろし、声穏やかに、
「私は通りすがりのつまらぬ老いばれ。怪しい者で
はござりませぬ。お前様には何やら物思ひのご様
子。まずは、さ、この石に腰かけて『ふうっ』と

息をなさいませ。そ、それで少しは落ち着かせよう。私はしばらく黙ってお側に立つてをります。足腰は危なうなりましたが、お前様の物思ひ、聴く耳だけは今も達者。お節介とは存じますが、口に出せば抜ける物の怪もござります。お心の片端なりともお話しなされませぬか」

と、その物腰のやさしさに、女はやうやく口開き、「まことにもつて痛み入ります。ご迷惑をおかけ申しました上に、ありがたいお言葉。それに甘えて粗忽ながらの間はず語り。お耳汚しをいたします。私は石原町の八百屋の隠居で『ひさ』と申します。夫の吉左衛門は幼馴染の筒井筒。いつなんどきも優しくて、荒い商売もせず店の者にも慕はれた根っからの善人。それはそれは私には過ぎた夫でございました。さりながら、無病は存外息災ならず、壮健で病（やまひ）知らずがあだとなり、五月二十日の梅雨空ににわかに胸を搔きむしり、そのまま息を引き取つたのでございます。さらぬ別れはいつかは来るものと知りながら、夫を頼り、夫だけを信じてまゐりました私は、生きる柱を失いました。せがれも生一本な仕事熱心ではございません。が、男の子といふものは声音の変はるころには母親が鬱陶しくなるもの。いつしか年も四十を数へ、近ごろは笑顔ひとつも面倒らしく、話す言葉も突慳貪（つけけんどん）。父親といふ重しが取れて、今ではなにごととも思ひのままの大旦那。嫁は日ごとの芝居三昧、孫も商ひ見習ひで、私はもはや厄介者。ああ、長々と愚痴なことを申しました」「いやなに、歌も芝居も絵も浄瑠璃も愚痴と涙のあればこそ。それを表に出してこそ胸のつかへも下ります。さりながら、おひさ・殿（どの）。思ひつめて滅多なことをなされては地獄の責め苦。往生なされたご亭主ともお目にはかかれますまいぞ」

「はい、おそれいりましてございます」

「今年は七夕に七日の月。おひさ殿もあのやうに今は半月、独り身なれど、心静かに余生を送り、百年の寿命を終えられたらば、一蓮托生、心は望月。あの星空を見てみるとこの世の悩みは藻屑ほど取るにも足らぬことばかり。ご覧なされ。天の川を泳ぐように十字の星が見えませう。あれは、外（と）つ国では白鳥の姿に見立てるさうでしてな。それそれ、首を長うして飛んでいるやうには見えませぬか。あのくちばしの星は天の川の中ほどで、ちやうど牽牛と織女の間。よくよく観れば連（つら）ね星。二つの星が寄り添ふやうに並んでをります」

「連ね星、でございますか。はて、この老いた目にはわかりませぬ。が、それはさだめて七夕の、年に一度の共寝の枕。あ、私としたことがお恥づかしい」

「ハハハ・・・」

「ホホホ・・・」

「アハハハハ・・・」

と足元照らす提灯に互ひの顔は見えねども、溶け合ふ心、どこやらに胸に覚えのなつかしき、時を忘れて語りあふ。

おひさの心の落ち着きを男はそつと見て取つて、「さあ、もう夜も更けました。あなた様には明日といふ日がござりませう。これにてご免蒙ります」と言へば、たちまち幻となりて消えゆく男の姿。「あの、お名前だけでも」とあたりぐると見回せどたえてゆくへも見えはこぞ。

こは妖（あやかし）か提灯の促すやうに浮き上がり進めば、おひさはあと追ひかけ、「おお、さうよ、目鼻立ちこそ知らねども、あの物腰にあの聲は疑ひもなう吉左衛門殿。さらば夫の魂が宙宇に迷ふ道すがら私の心を見て取つて天降（あまくだ）りしか、ありがたや。この提灯のとしびはしばし生きよとこの婆（ばば）をこの世に戻すしるべにて極楽浄土に迷ひなく夫を送る送り提灯」

へ薄明かり

さす道の辺（べ）にきりぎりす
鳴くや七月（ななつき）七草の
花もかそけき細道を
たどれば浮かぶ夫（つま）の声
わが女郎花（おみなえし）なでしこと
いとしがつたるやさしさに
心は尾花となびけども

今はひとりの寝（い）ねがてに
萩の下葉も色づくや
お前の朝顔見えぬ日も
主（ぬし）知らぬ香（か）の藤袴
うらみはせねど葛の葉の
などか藻屑（もくず）と消えたまふ

消えては浮かび浮かんではまた離れゆく不思議のありさま。夫の愛に導かれ歩み歩めば、提灯はうなづくやうに揺らめきて、ひときは明（あか）き光を放ち、西の空へと遠ざかる。

両手合はせて見送るおひさ。ふと振り返れば見覚えの我が家の提灯、息子の顔。

「おや、これは吉之助殿」

「おつかさん、こんな夜更けにどこにいらしてたんです。店のものが手分けして探しに行つてるんですよ。これ、惣太。この界隈をひとつ走りして、『ご隠居様は戻られました』と、みんなを呼び戻してきておくれ。よろしいですか、おつかさん。明日からは七つを過ぎての外歩き、きつぱりとやめてもらひませう。お部屋にごぞつて三味線のおさらひなり、宗通（そうつう）先生のお点前なり、もつぱら存分になされませ」

と、頭ごなしの託（かこ）ちごと。言はれておひさは首うなだれ、

「すまぬことをしました。今後はきつと気を付けます。ひらに」

と詫ぶる母親に息子は言葉噛み殺し、鼻を鳴らして内に入る。

あとにおひさは寂しさの闇に浮かべる弓張の月はやうやく傾きて、風やはらかき初秋の空見上ぐれば、にじむ涙のしわざかや、蒼（あお）と金（こがね）にきらめく星。

「ああ、あれがふたつの連ね星。吉左衛門殿、お前と私の共寝の枕。恋しうござる、吉左殿」

と星のまたたき、涙のまなこ。濡らすまつ毛のひとすぢに夫を慕ふ心根はあやめもしらぬ初恋の乙女のごとく。

文献、注

- 1) <http://bunkazai.pref.yamaguchi.lg.jp>
- 2) ただし、野澤吉甫師の名は明治期の文楽の番付には見えない。義太夫年表編纂会『義太夫年表（明治篇）』義太夫年表刊行会 1956
- 3) 三戸昌子氏の回想による。
- 4) 2022年9月23日に洞春寺（山口市水の上町）において、歌舞伎竹本連中三味線の野澤松也師の弾き語りに乗せて、三戸氏がお弓とおつるの人形を自在に操って上演された。三戸氏は、松也師が人形の動きに留意しつつ臨機応変に語ってくださったと回想していた。
- 5) たとえば、奈良国立文化財研究所『年輪に歴史を読むー日本における古年輪学の成立ー』奈良国立文化財研究所学報（第48冊）1990 p122
- 6) 『吾妻鏡』建久六年三月十二日条。
- 7) 『群書類従』釈家部所収。
- 8) 『大日本史料』の引く『阿弥陀寺鉄塔銘』（筆

者は現物未見)には「造東大寺杣始文治二年【丙午】四月十八日」と見える。阿弥陀寺は防府市大字牟礼上坂本にある華嚴宗の寺（東大寺別院）。

- 9) 重源上人杣入り八〇〇年記念誌編集委員会『徳地の俊乗坊重源』1986 徳地町発行。P128以下。また、青木淳「聖伝承の系譜一周防・徳地の俊乗坊重源一」（『印度學佛教學研究』第四十七卷二号）1999.3にも紹介がある。
- 10) 石風呂にせよ、阿弥陀寺（防府市）に設けられた湯屋にせよ、施浴（湯施行）の意味がある。
- 11) 佐波川の名称の起源にも重源が関わるという伝承がある。大和から同行した番匠らが「久しく魚を食べていない」と言ったとき、重源が木片に「鯖」の字を書いて池や川に投げ込むとそれが魚の鯖に変じたといい、これを佐波（さば）川の由来とするのである。
- 12) 『東大寺造営供養記』に「水淺故不流下、仍関河而湛水也、七里之間関水之所百十八處也」とある。
- 13) 山口県文書館『防長風土注進案』11巻「徳地宰判」1964（原書は1842年に長州藩が編纂させたもの）によると、蓮花坊が岩に当たって絶命したのは文治五年（1189）八月二日。
- 14) 『徳地の俊乗坊重源』や青木淳「聖伝承の系譜一周防・徳地の俊乗坊重源一」に行事の概要が記されている。青木氏によれば、蓮花坊の木像は「結跏して齒を剥き出しにするという異形のもの」である。
- 15) 重源を誇る気持ちの表れとして、「重源の郷」という体験交流公園（2023年4月から休園、2024年度に再開）がある。味噌、こんにゃく、わさび、和紙などの特産品の販売所は東大寺南大門を模した建物でその名も「南大門」と言い、県道184号線沿い（山口市徳地堀）には重源上人顕彰碑や重源上人像が建てられている。そして地元の人は今も「重源上人」などとは言わず、親しみをこめて「重源さん」と呼んでいる。
- 16) 片山剛「江戸情七不思議」千里金蘭大学紀要第16号（通巻50号）2019

※使用した写真はすべて筆者撮影のものである。

